

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03213

研究課題名(和文)南九州の後期旧石器から縄文時代草創期・早期への移行に伴う技術と行動組織の研究

研究課題名(英文)Technological and Behavioral Organization during Late Upper Paleolithic and Incipient-Initial Jomon Transitions in Southern Kyushu

研究代表者

飯塚 文枝 (Iizuka, Fumie)

東京都立大学・人文科学研究科・客員研究員

研究者番号：80744664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：後期更新世から完新世への移行期の変化は新石器化のプロセスと言われ、現在、その変化が多様であることから、地域に特化した事例研究が求められている。本研究では南九州に焦点を当て、後期旧石器から縄文時代草創期・早期への技術と行動の変化および環境変動との関連性を探った。結果、海面の上昇が、縄文時代草創期の土器技術の採用や早期への移行と関連し、気候変動が縄文時代早期への移行と、気候の温暖化と植生の変化が縄文時代早期における技術の変化や地域的な人口増加と連動している可能性が推定された。縄文時代草創期については種子島と南九州本島との間で土器の技術的な変異性が明らかになったため、今後その理由を解明していきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新石器化のプロセスの研究事例として、南九州において、後期旧石器から縄文時代草創期・早期への変化の理由を土器・石器技術の製作過程の再構築および古環境・景観の変化との比較から探ること。

研究成果の概要(英文)：Changes that occurred during the late Pleistocene to Holocene transitions are often called the Neolithization processes. Because of the large variability in these transitions, in-depth investigations of regional cases are now required. In this project, we focus on the Upper Paleolithic to Incipient and Initial Jomon transitions of southern Kyushu, Japan, thoroughly investigating the correspondence between technological and paleoenvironmental changes. The results suggest that sea level changes correspond with the adoption of pottery at the onset of the Incipient Jomon and change to the Initial Jomon. The transition to the Initial Jomon is also associated with climate change. A regional population increase and technological changes during the Initial Jomon may correspond with climatic warming and vegetational change. During the Incipient Jomon, ceramic technological variability between Tanegashima and Kyushu proper is observed. In a future project, we will investigate the reasons.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 旧石器から縄文移行期 南九州 土器分析 石器分析 計量考古学 古環境分析 景観分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

後期更新世から完新世への移行期は気候変動や温暖化ともに動植物の栽培化、定住化、土器技術の発達、磨製石器の使用など様々な変化が起こり、その変化は新石器化のプロセスとされている。この原点となるのが「新石器革命」の理論（Childe 1951[1936]）であるが、近年では色々な研究がなされ、新石器化の背景と過程には地域間および地域内の多様性があることがわかってきた（e.g., Flannery 1969, Gibbs 2020; 森先 2015; Piperno 2011; Zeder 2009）。日本列島では後期更新世終末の縄文時代草創期（約 15,000-11,500/11,000 cal BP）が新石器時代の始まりを理解するための鍵とみられる。後期旧石器から、縄文時代草創期を挟み、縄文時代早期に位置づけられる膨大な数の遺跡が発見され、発掘調査データが蓄積されている。その中で南九州は特に、最終氷期最盛期（LGM）以降、温暖な気候環境の中で温帯森林が残存し、ca. 12,900 cal BP に始まるヤンガードリアス寒冷期も激しい変化に見舞われなかった（飯塚他 2016；三宅 2013）。竪穴式住居、土器、大型磨製石器など定住度を示す遺構や遺物が日本列島で最も早い縄文時代草創期（14,000/13,500-12,800 cal BP）から認められ（Iizuka and Izuho 2017; Morisaki and Sato 2014; Pearson 2006）、遺跡の発見数も多い。また、縄文時代草創期の文化層の上に薩摩テフラ（ca. 12,800 cal BP）が分布し、年代が良く把握されている。このことから南九州は新石器化のプロセスに関わる研究に適している。

## 2. 研究の目的：

本研究の主な目的は南九州における LGM 以後（ca. 19,000～）の後期旧石器から、縄文時代草創期・早期移行期（ca. 14,000/13,500-7,300 cal BP）の石器・土器技術の変化と行動組織の変化を推測し、それを古環境・遺跡の立地の変化の種類およびタイミングと比較することにより、新石器生活への行動変化の理由を探ることである（e.g., Clark et al. 2012; Iizuka and Izuho 2017; 桑畑 2013）。土器・石器技術に関しては、製作過程を再構築することから、生産・流通のパターン、南九州内での技術的変異性、定住度、移動度、交換、および製作者の意図を推測する。また、それらの技術的パターンと景観・古環境分析結果を合わせ、総合的に考察する。

## 3. 研究の方法

南九州の後期旧石器時代、縄文時代草創期、および早期の考古学資料を対象とした研究を実施する。土器製作過程分析と石器製作過程分析を分析の柱として実行し、その結果を遺跡景観データおよび古環境データを加えて総合的に考察する。これにより、各時期の人間の技術と行動が具体的にどう組織され、どう変化したのか説明する。発掘報告書掲載データおよび実資料の分析を遺跡毎に進めるとともに、周辺地域のデータ収集も並行しておこなう。南九州の人間行動の組織と変化に関する説明をまとめ、遺跡景観・古環境データを加えて議論し、最終的な成果をまとめる。

## 4. 研究成果

研究代表者等は本研究期間中の各段階の成果として複数の国内・国際誌論文を発表し、国際学会において発表を行った。

南九州では、鹿児島県立埋蔵文化財センターに収蔵されている中尾遺跡、向栴城跡遺跡、仁田尾中 A・B 遺跡、西丸尾遺跡、桐木遺跡、加治屋園遺跡、三角山 I 遺跡、の縄文草創期の土器技術の視覚的分析および実体顕微鏡を使った分析を行った。中尾遺跡、西丸尾遺跡および桐木遺跡については縄文時代早期土器技術の基礎的データも得た。西丸尾遺跡および加治屋園遺跡については石器分析を行った。また鹿児島県西之表市教育委員会を訪問し、鬼ヶ野遺跡・二本松遺跡の縄文時代草創期土器および奥ノ仁田遺跡の縄文時代草創期・早期土器技術の基礎的なデータを得た。奈良文化財研究所・森先一貴博士の協力を得、石器の製作工程の分析もなされた。また、南さつま市教育委員会（歴史交流館金峰）を訪問し、柊ノ原遺跡・志風頭遺跡の縄文時代草創期・早期土器技術の基礎的なデータを得た。

三角山I遺跡、掃除山遺跡、建昌城跡遺跡、奥ノ仁田遺跡、および鬼ヶ野遺跡に関してはアリゾナ大学のパメラ・バンディバー博士の協力を得、遺物の視覚的分析とゼロラジオグラフィによるデータを組み合わせ、縄文時代草創期土器の成形技術分析を行った。また、土器の生産地同定のため、原材料採取を行った。三角山I遺跡の縄文時代草創期土器と原材料の薄片分析および地質図観察から産地同定を行った。これらの遺物を使い、ミズーリ大学のジェフリー・ファーガソン博士が放射化分析を行い、共同で、化学組成に基づく産地同定を行った。また、鹿児島県立埋蔵文化センター馬籠亮道氏、鹿児島大学総合研究博物館、熊本県人吉市教育委員会、熊本県湯前町教育委員会の調査専門家の協力を得、ファーガソン博士も加わり、黒曜石遺物の産地同定を行うため、鹿児島県および熊本県で巡検を行った。三船、上牛鼻、下牛鼻、桑木津留、小原野、竹屋敷、魚見岳、宮ヶ浜、今和泉において黒曜石資料の採取を行った。ファーガソン博士は現在黒曜石資料の蛍光X線分析を終了し、放射化分析結果との比較を行っている。

この他、南九州における土器の起源と新石器化を東アジア・北東アジア全体の中で理解するため、ロシア、トランスバイカル州立大学およびロシア科学アカデミー・シベリア支部を訪問し、ウスチメンザ、ストゥデヨノエ、ガーシャ遺跡出土土器遺物の基礎的データを得、東京都埋蔵文化財センターに収蔵されている多摩ニュータウン遺跡出土の縄文時代草創期土器分析、モンゴル科学アカデミーに収蔵されているモンゴル東部草原地帯、および南東部ゴビ砂漠の初期の土器分析、東京大学夏木大吾氏によって北海道タチカルシュナイ遺跡M-I地点から発掘された縄文時代草創期の土器分析を行った。また東・北東アジアの土器の使用および新石器化の開始時期が、推測される北東アジアから新大陸への人間の移動時期と一部重なるため、それに関わる論文を執筆し、オレゴン大学、ローレン・デイビス博士の率いる、北東アジアからアメリカ大陸への後期更新世の人間の移動に関する研究に加わった。

総括的研究発表で顕著なものとしては、飯塚文枝はセントラルワシントン大学のカーリーサ・テリー博士とともに、アイルランド、ダブリンで行われた国際第四紀連合（INQUA）にて旧大陸における土器の起源に関するシンポジウムを組織し、そのシンポジウムにて三角山I遺跡の土器産地同定と人間の行動組織およびトランスバイカル土器の起源と年代に関する研究発表を行った。その後、飯塚とテリー博士はINQUAシンポジウムの発表者が投稿する論文の特集号を *Quaternary International* 誌に組み、編集し、間もなく出版される予定である。

これらの研究成果から以下のことが指摘される。種子島の鬼ヶ野遺跡、二本松遺跡、奥ノ仁田遺跡および三角山I遺跡の土器を比較（飯塚他 2016, 2021; Iizuka and Izuhō 2017）すると、鬼ヶ野および三角山I遺跡の土器は一部遠距離から持ち込まれた可能性がある。三角山I遺跡の土器は当初花崗岩系の岩片の少量含まれた土器片も島外由来と推測していたが、土器薄片とEPMA分析、原材料の薄片との比較により最大14%の土器片（花崗岩由来・ATテフラ由来）のみが島外から持ち込まれたと推定された（Iizuka et al. 2021）。放射化分析からも同様の結果が得られた（Iizuka et al. 2021）。三角山I遺跡と鬼ヶ野遺跡の生産・流通、定住・移動のパターンは類似していたと考えられる。土器製作者の定住度は高いものの、Fitzhugh et al. (2011)を参照し、ある程度、遠距離で狩猟採集する島外のグループと交換をしていたと考えた。また、鬼ヶ野遺跡と三角山I遺跡は胴部器厚やモース硬度が似ており、製作者の意図が類似していたと言える。奥ノ仁田遺跡の土器観察を行った資料に基づく、現地で生産消費され、遠距離運搬の形跡はなかった。他遺跡より土器の硬度が高い傾向にあるため、製作者が耐衝撃や長期に渡る使用を優先した可能性がある。二本松遺跡は遠距離から持ち込まれたと推定される土器片はなく、その硬度も低い傾向にあった。土器の成形方法はいずれも重ねた平塊を中心としたが、奥ノ仁田遺跡などでは、一部、口縁部に粘土紐が使われている形跡が認められる（飯塚他 2021）。

森先博士（e.g., 飯塚他 2021; Iizuka et al. 2020）による石器分析では、三角山I遺跡および鬼ヶ野遺跡は石鏃が多いものの、形状や大きさ、技法が多少異なり、頁岩円礫を用いた両極技法が中心である。両遺跡とも島外の遠隔地から得られた原材料による石鏃が一定数認めら

れる。石鏃の数は鬼ヶ野遺跡が圧倒的に多く、集中的に製作されたと推測された。奥ノ仁田遺跡は集石、敲石、磨石、および石皿が多く、剥片石器はわずかで、植物質食料の加工や調理の場だった可能性が推定された。

九州本島の鹿児島県、中尾遺跡（飯塚他 2019）、向栴城跡遺跡（飯塚他 2019）、建昌城跡遺跡（飯塚他 2018）、および掃除山遺跡（飯塚他 2018）の視覚的分析からは、土器は遺跡の近くで得られる原材料で作られ消費されたと推測された。土器のみのデータからは定住度の高さが推測された。成形方法は主に平塊を使用している。掃除山遺跡は建昌城跡遺跡の土器技術分析の結果は、遺構や石器の変異性のパターンと類似して、掃除山遺跡の土器が建昌城跡遺跡より象徴的な社会的行動の目的も含め、使用意図や使用方法の種類が多かった可能性を示した。中尾遺跡および向栴城跡遺跡出土土器は際だった技術の変異性は認められなかった。両遺跡ともモース硬度が低く含有物が砂であることは耐衝撃よりも耐火性が重視されたと推測された。

全体として、後期旧石器後半期から縄文時代草創期にかけて石器や遺構の多様性が増え（Iizuka and Izuho 2017）、南九州の環境と技術変化の関係は、海面の上昇による種子島と九州本土の分離と鹿児島湾の形成が（Moriwaki et al. 2015）、縄文時代草創期の土器技術の採用と早期への変化、ヤングドリラス期への変化も縄文時代草創期から早期への移行と関連し、気候の温暖化と植生の変化が、縄文早期における土器技術、石器技術の変化および地域的な人口増加と連動している可能性が推定された（Iizuka and Izuho 2017）。また縄文時代草創期の種子島は温暖で資源の多様性が高く、地域間交流の場であった（Iizuka 2018）または島化に関わる問題を回避するため大隅半島南部などと交換を行っていた可能性が考えられた（Iizuka et al. 2020）。

南九州との比較目的で行ってきたモンゴル（Iizuka et al. 2018）およびロシア・トランスバイカル、本州および北海道の初期の土器の視覚的分析や考古背景の分析（Izuho et al. 2021）、文献の調査（Iizuka 2018）からは、（1）放射性炭素年代測定による後期更新世発生説とは異なり、南中国は農耕への移行期に土器が採用され、トランスバイカルの土器年代と共に新しい年代である可能性があり、再評価が必要なこと、（2）本州に最も古い確実性の高い年代が認められること、（3）南九州は地域的に後期更新世に属する年代の信頼性が最も高く、技術の再構築および行動解釈に適していると指摘した。（4）また、後期更新世の本州の土器発生年代とベリンジア・アメリカ大陸に人類が渡った時期が一部重なることは、もし移住者が土器を携えていたならば、本州が起源である可能性があることを推測した。

これらの研究成果から、南九州の初期の土器を中心とした技術の変異性、環境の変化に対する狩猟採集民の対応と行動変化についての理解が深まった。特に、土器に関しては、縄文時代草創期の種子島と南九州本島の違いが明らかになりつつあり、今後、海面上昇と種子島の縄文時代草創期の開始時期と狩猟採集民の行動戦略との関係に重点を置き、その理由を説明していきたい。これに加え、南九州の土器の起源と新石器化と東・北東アジアの他の地域との変異性について明らかにしていきたい。

#### 参考文献：

- Childe, Gordon 1951 (1936) *Man Makes Himself*. A Mentor Book, the New American Library, New York.
- Clark, P., J. Shakun, P. Baker, P. Bartlein, S. Brewer, E. Brook, A. Carlson, H. Cheng, D. Kaufman, Z. Liu, T. Marchitto, A. Mix, C. Morrill, B. Otto-Bliesner, K. Pahnke, J. Russell, C. Whitlock, J. Adkins, J. Blois, J. Clark, S. Colman, W. Curry, B. Flower, F. He, T. Johnson, J. Lynch-Stieglitz, V. Markgraf, J. McManus, J. Mitrovica, J., P. Moreno, and J. Williams, 2012. Global Climate Evolution During the Last Deglaciation. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 109 (19), E1134-E1142.
- Fitzhugh, Ben, S. Colby Phillips, and Erik Gjesfjeld 2011 Modeling Hunter-Gatherer Information Network and Archaeological Case Study from the Kuril Islands. In *Information and Its Role in Hunter-gatherer Band Adaptations*, edited by Robert Wallon, William Lovis, and Robert Hitchcock, pp. 85-115. UCLA Cotsen Institute of Archaeology, Los Angeles.
- Flannery, Kent

- 1969 Origins and Ecological Effects of Early Domestication in Iran and Near East. In *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*, edited by P.J. Ucko and G. W. Dimbleby, pp. 73-100. Duckworth, London.
- Gibbs, K.  
2021 The emergence of ceramics in Southwest Asia: early pottery in farming communities. *Quaternary International*. <https://doi.org/10.1016/j.quaint.2020.09.040>.
- Iizuka, F.  
2018 The Timing and Behavioral Context of the Late Pleistocene Adoption of Ceramics in Greater East and Northeast Asia and the First People (Without Pottery) in the Americas. *PaleoAmerica* 4(4):267-324.
- Iizuka, Fumie and Masami Izuho  
2017 Late Upper Paleolithic-Initial Jomon Transitions, Southern Kyushu, Japan: Regional Scale to Macro Processes a Close Look. *Quaternary International* 441:102-112.
- Iizuka, F., M. Izuho, B. Gunchinsuren, B. Tsogotbaatar, D. Odsuren  
2018 Manufacturing Techniques and Formal Variability of Pottery from Five Neolithic Sites in Eastern Steppe and the Gobi Desert, Mongolia. *Studia Archaeologica Instituti Historiae Et Archaeologici Academiae Scientiarum Mongolici* XXXVII 5 – 16.
- Iizuka, F., Izuho, M., and J. Ferguson  
2021 Geochemical Provenance Analysis of Pre-Younger-Dryas Pottery from Southern Japan Using Neutron Activation. Society for American Archaeology 86<sup>th</sup> Annual Meeting (Online).
- 飯塚文枝, 出穂雅実, パメラ・バンディバー, マーク・アルデンダーファー  
2019 「縄文時代草創期に位置づけられる土器技術と変異性の基礎的研究(3):鹿児島県南さつま市金峰町中尾遺跡および日置市東市来町向柵城跡の事例」『鹿児島県立埋蔵文化財センター・研究紀要・年報・縄文の森から』 11:33-52
- 飯塚文枝, 出穂雅実, パメラ・バンディバー, 深野信之, 長野陽介  
2018 「縄文時代草創期の土器製作技術と変異性に関する基礎的研究(2)鹿児島県始良市建昌城跡および鹿児島市掃除山遺跡の事例」『鹿児島考古』 48:57-76 .
- 飯塚文枝, 出穂雅実, パメラ・バンディバー、大久保浩二  
2016 「鹿児島県中種子町三角山Ⅰ遺跡出土縄文時代草創期土器の成形技術とその変異性の研究」『鹿児島県立埋蔵文化財センター・研究紀要・年報・縄文の森から』 9:31-50 .
- 飯塚文枝・パメラ・バンディバー・森先一貴・出穂雅実・沖田純一郎・マーク・アルデンダーファー  
2021 「縄文時代草創期の土器製作技術と変異性に関する基礎的研究(4)―鹿児島県西之表市(種子島北半)鬼ヶ野遺跡, 二本松遺跡, および奥ノ仁田遺跡の事例―」『鹿児島考古』 50:221-233.
- 柴畑光博  
2013 「鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)の年代と九州縄文土器編年との対応関係」『第四紀研究』 51(4):111-125.
- 三宅尚  
2013 「西南日本にはどんな森があった? - 花粉化石からわかってきたこと」『第28回日本植生史学会』 15-19.
- 森先一貴  
2015 「更新世末の九州地方における先史狩猟採集民の居住形態」『第四紀研究』 5(4):257-270.  
K. Morisaki, and Sato, H., 2014. Lithic Technological and Human Behavioral Diversity Before and During the Late Glacial: A Japanese Case Study. *Quaternary International* 347: 200-210.
- 森脇広, 松島義章, 杉原重夫, 大平明夫, 大木公彦, 増淵和夫,  
弦巻賢介  
2015 「鹿児島湾北岸, 国分平野における過去 15,000 年間の海面変化と古環境変化」『第四紀研究』 54(4):149-171.
- Pearson, R., 2006. Jomon Hot Spot: Increasing Sedentism in South-western Japan in the Incipient Jomon (14,000-9250 cal. BC) and Earliest Jomon (9250-5300 cal. BC) Periods. *World Archaeology* 38 (2):258-329.
- Piperno, Dolores  
2011 The Origins of Plant Domestication in the New World Tropics: Patterns, Process, and New Developments. *Current Anthropology* 52(S4):S453-S470.
- Zeder, Melinda A.  
2009 The Neolithic Macro-(R)evolution: Macroevolutionary Theory and the Study of Culture Change. *Journal of Anthropological Archaeology* 17:1-63.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 26件 / うち国際共著 16件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Loren G. Davis, David B. Madsen, Lorena Becerra-Valdivia, Thomas Higham, David A. Sisson, Sarah M. Skinner, Daniel Stueber, Alexander J. Nyers, Amanda Keen-Zebert, Christina Neudorf, Melissa Cheyney, Masami Izuho, Fumie Iizuka, Samuel R. Burns, Clinton W. Epps, Samuel C. Willis and Ian Buvit	4. 巻 365
2. 論文標題 Late Upper Paleolithic occupation at Cooper 's Ferry, Idaho, USA, ~16,000 years ago	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Science	6. 最初と最後の頁 891-897
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1126/science.aax9830	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Iizuka, F.	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Geochronology and the Late Pleistocene Origins of Pottery: A Special Case from Southern Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Backdirt: Annual Review of the Cotsen Institute of Archaeology at UCLA	6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯塚文枝、出穂雅実、パメラ・バンディバー、マーク・アルデンダーファー	4. 巻 11
2. 論文標題 縄文時代草創期に位置づけられる土器技術と変異性の基礎的研究 (3) : 鹿児島県南さつま市金峰町中尾遺跡および日置市東市来町向栴城跡の事例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究紀要・年報 縄文の森から	6. 最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuichi Nakazawa, Kyohei Sano, Yasuo Naoe, Naofumi Sakamoto, Masami Izuho, Hidehiko Nomura	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Role of minimum analytical nodules in obsidian hydration measurement: Insight from Kyu-Shirataki 3 in Hokkaido, Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Association for Obsidian Studies Bulletin	6. 最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Jordan Pratt, Ted Goebel, Kelly Graf and Masami Izuho	4. 巻 N/A
2. 論文標題 A Circum-Pacific Perspective on the Origin of Stemmed Points in North America	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PaleoAmerica	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20555563.2019.1695500	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Masami Izuho, Kazuki Morisaki, Hiroyuki Sato	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Recent Progress of the Paleolithic Research in Asia: Cultural diversities and Paleoenvironmental changes	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2020.01.010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izuka, F.	4. 巻 4(4)
2. 論文標題 The Timing and Behavioral Context of the Late Pleistocene Adoption of Ceramics in Greater East and Northeast Asia and the First People (Without Pottery) in the Americas.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PaleoAmerica	6. 最初と最後の頁 267-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20555563.2018.1563406	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izuka, F., Izuho, M., Gunchinsuren, B., Tsogotbaatar, B., & Odsuren, D.	4. 巻 XXXVII
2. 論文標題 Techniques and Formal Variability of Pottery from Five Neolithic Sites in Eastern Steppe and the Gobi Desert, Mongolia	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Studia Archaeologica Instituti Historiae Et Archaeologici Academiae Scientiarum Mongolici	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 飯塚文枝、出穂雅実、パメラ・バンディパー、深野信之、長野陽介、マーク・アルデンダーファー	4. 巻 48
2. 論文標題 縄文時代草創期の土器製作技術と変異性に関する基礎的研究(2)：鹿児島県始良市建昌城跡遺跡および鹿児島市掃除山遺跡の事例	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島考古	6. 最初と最後の頁 61-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 飯塚文枝、出穂雅実、パメラ・バンディパー、マーク・アルデンダーファー	4. 巻 11
2. 論文標題 縄文時代草創期に位置づけられる土器技術と変異性の基礎的研究(3)：鹿児島県南さつま市金峰町中尾遺跡および東市来町向榕城跡の事例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究紀要・年報 縄文の森から	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 岩瀬彬・夏木大吾・出穂雅実	4. 巻 V
2. 論文標題 美幌町豊岡7遺跡の忍路子型細石刃刀核を伴う石器群の使用痕分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 論集忍路子	6. 最初と最後の頁 35-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morisaki, K., K.Sano and M.Izuho	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Early Upper Paleolithic blade technology in the Japanese Archipelago	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2018.03.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Izuho, M., D.Kunikita, Y.Nakazawa, N.Oda, K.Hiromatsu and O.Takahashi	4. 巻 4
2. 論文標題 New AMS Dates from the Shukubai-Kaso Site (Loc. Sankakuyama), Hokkaido (Japan): Refining the Chronology of Small Flake-Based Assemblages During the Early Upper Paleolithic in the Paleo-Sakhalin-Hokkaido-Kurile Peninsula	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PaleoAmerica	6. 最初と最後の頁 134-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20555563.2018.1457392	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izuho, M., K.Terry, S.Vasil'ev, M.Konstantinov and K.Takahashi	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Tolbaga revisited: Scrutinizing occupation duration and its relationship with the faunal landscape during MIS 3 and MIS 2	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2018.09.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Izuho, M., N. Zwyns and K. Sano	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Guest Editorial Special Issue: The Initial Upper Paleolithic in Asia: assemblages variability, timing and significance,	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2018.10.003	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 西藤清秀・山本孝文・飯島武次・田畑幸嗣・出穂雅美・臼杵勲・千本真生・佐々木憲一・寺崎秀一郎・岡本克之・溝口孝司	4. 巻 47
2. 論文標題 日本考古学の国際化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 121-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fumie Iizuka and Masami Izuho	4. 巻 441
2. 論文標題 Late Upper Paleolithic-Initial Jomon Transitions, Southern Kyushu, Japan: Regional Scale to Macro Processes a Close Look	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 102-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2016.12.040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fumie Iizuka	4. 巻 0
2. 論文標題 The Earliest Panamanian Pottery: Reconstructing Production and Distribution of Monagrillo ceramics through Petrographic Provenance Analysis	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Geoarchaeology	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2016.12.040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半田直人, 出穂雅美, 高橋啓一, 飯塚文枝, Batmunkh Tsogtbaatar, Byambaa Gunchinsuren, Davaakhuu Odsuren, Lochin Ishtseren	4. 巻 23, 12
2. 論文標題 モンゴル東部オンドルハーンより後期更新世サイ科化石の発見	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地質学雑誌	6. 最初と最後の頁 v-vi
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5575/geosoc.2017.0058	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Izuho Masami, Ferguson Jeffrey R., Vasilevski Alexander, Grishchenko Vyacheslav, Yamada Satoru, Oda Noriyoshi, Sato Hiroyuki	4. 巻 12
2. 論文標題 Obsidian sourcing analysis by X-ray fluorescence (XRF) for the Neolithic sites of Slavnaya 4 and 5, Sakhalin Islands (Russia)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 54 ~ 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2017.09.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Morisaki Kazuki, Izuho Masami, Sato Hiroyuki	4. 巻 9
2. 論文標題 Human Adaptive Responses to Environmental Change During the Pleistocene-Holocene Transition in the Japanese Archipelago	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Lithic Technological Organization and Paleoenvironmental Change, Studies in Human Ecology and Adaptation	6. 最初と最後の頁 91 ~ 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-319-64407-3_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morisaki Kazuki, Sano Katsuhiko, Izuho Masami	4. 巻 14
2. 論文標題 Early Upper Paleolithic blade technology in the Japanese Archipelago	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2018.03.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izuho Masami, Kunikita Dai, Nakazawa Yuichi, Oda Noriyoshi, Hiromatsu Koichi, Takahashi Osamu	4. 巻 4
2. 論文標題 New AMS Dates from the Shukubai-Kaso Site (Loc. Sankakuyama), Hokkaido (Japan): Refining the Chronology of Small Flake-Based Assemblages During the Early Upper Paleolithic in the Paleo-Sakhalin-Hokkaido-Kurile Peninsula	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PaleoAmerica	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20555563.2018.1457392	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Weber, M., Valencia, V., Caballero, J., Villada, B., Cardona, A., & Izuka, F.	4. 巻 62,3
2. 論文標題 U-Pb Dating of Zircon: A Sourcing Method for Pottery from the La Morena Archaeological Site, NW Colombia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Archaeometry	6. 最初と最後の頁 439-468
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/arcm.12532	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Iizuka, F., Izuho, M., Wada, K., Barnard, H., Vandiver, P., Morisaki, K., Wendt, C., & Aldenderfer, M	4. 巻 0
2. 論文標題 Of the Sea and Volcano: A Petrographic Provenance Investigation of Locally Produced and Imported Ware of Pre-Younger Dryas Tanegashima Island, Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2020.10.009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Izuho, M., Iizuka, F., Ian Buvit & M. Konstantinov	4. 巻 0
2. 論文標題 Problems on the Age Determination of the Oldest Pottery Yielding Horizons at Studenoe 1 Site, Transbaikal (Southern Siberia)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2021.02.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 飯塚文枝・パメラ・バンディバー・森先一貴・出穂雅実・沖田純一郎・マーク・アルデンダーファー	4. 巻 50
2. 論文標題 縄文時代草創期の土器製作技術と変異性に関する基礎的研究(4) 鹿児島県西之表市(種子島北半)鬼ヶ野遺跡, 二本松遺跡, および奥ノ仁田遺跡の事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島考古	6. 最初と最後の頁 221-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 出穂雅実	4. 巻 0
2. 論文標題 氷期に遡る最初のアメリカ人の出現とその拡散	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メソアメリカ文明ゼミナール, 伊藤伸幸・嘉幡 茂・村上達也編, 勉誠出版	6. 最初と最後の頁 3-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Davis, L. G., D. B. Madsen, D. A. Sisson, and M. Izuhu	4. 巻 0
2. 論文標題 Response to review of Late Upper Paleolithic occupation at Cooper 's Ferry, Idaho, USA, &#8764;16,000 years ago by Fiedel et al.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PaleoAmerica	6. 最初と最後の頁 x-xx
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20555563.2020.1788863	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Izuhu, M., K. Morisaki, and H. Sato	4. 巻 0
2. 論文標題 Recent progress of the Paleolithic research in Asia: Cultural diversities and paleoenvironmental changes.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 x-xx
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2020.01.010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計36件 (うち招待講演 15件 / うち国際学会 27件)

1. 発表者名 M. Konstantinov, M. Izuhu, F. Iizuka
2. 発表標題 Criticism of Fantastic Ideas About the Extraordinary Antiquity of Ceramics in the Transbaikal, Russia
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Union, INQUA 2019, Congress, Dublin, Ireland (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 F. Iizuka, M. Izuhu, K. Wada, H. Barnard, P. Vandiver, K. Morisaki, C. Wendt, M. Aldenderfer
2. 発表標題 Of the Sea and Volcano: Provenance Study of teh Pre-Younger Dryas Pottery on Tanegashima Island, Japan
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Union, INQUA 2019, Congress, Dublin, Ireland (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iizuka, F.
2. 発表標題 東アジア・北東アジアの土器の起源：問題点への解決へ向けて
3. 学会等名 モンゴル・トランスバイカル研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 斎野裕彦、飯塚文枝
2. 発表標題 災害考古学の針路。デンマークで開催されたシンポジウム『大災害の諸相-考古学の視点から』を通して。
3. 学会等名 日本考古学協会85回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 F. Iizuka, P Vandiver, K. Morisaki, M. Izuho, J. Okita, M. Aldenderfer
2. 発表標題 Ceramic Variability and Behavioral Context of the Incipient Jomon Sites on Tanegashima Island, Southern Japan
3. 学会等名 Society for American Archaeology 84th Annual Meeting, Albuquerque, NM, USA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Izuho, Masami (Tokyo Metropolitan University) and Jeffrey R. Ferguson (MURR Archaeometry Laboratory, Research Reactor Cen)
2. 発表標題 Temporal Changes in Obsidian Procurement Strategy during the Upper Paleolithic on Hokkaido
3. 学会等名 SAA 84th Annual Meeting, Albuquerque Convention Center, Albuquerque, NM, USA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Gillam, J. Christopher (Winthrop University) and Masami Izuho (Tokyo Metropolitan University)
2. 発表標題 Upper Paleolithic Cultural Landscapes of the Selenge Tributaries, Northern Mongolia
3. 学会等名 SAA 84th Annual Meeting, Albuquerque Convention Center, Albuquerque, NM, USA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 出穂雅実、長谷川精
2. 発表標題 上部旧石器時代のモンゴルおよびザバイカルにおける環境変化と人類の適応行動に関する予察
3. 学会等名 「パレオアジア文化史学」第7回研究大会、名古屋大学東山キャンパス
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hasegawa, H., N. Noma, N. Katsuta, M. Murayama, T. Tamura, M. Izuho, N. Ichinnorov, D. Davaadorj, N. Hasebe, M. Sasaoka, M. Iwai
2. 発表標題 Paleoenvironmental changes recorded in Orog Lake, southwestern Mongolia during MIS 3 and its relationship with Homo sapiens 's migration into northern Asia (モンゴル南西部オログ湖堆積物から復元される最終氷期～完新世の古環境 変動とホモ・サピエンス 定着との関係性)
3. 学会等名 JpGU Meeting 2019, Makuhari Messe, Chiba
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Izuho, M., N. Zwyns, and S. Kuhn (organizers)
2. 発表標題 Unanswered questions on the Initial Upper Paleolithic and the first modern human dispersal across Eurasia
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Research (INQUA) Congress, Dublin, Ireland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 F. Iizuka and K. Terry (organizers)
2. 発表標題 Old World Ceramic Origins and Behavioural Contexts from the Late Pleistocene to Early Holocene
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Research (INQUA) Congress, Dublin, Ireland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Izuho, M., H. Hasegawa, G. Byambaa, and T. Batmunkh
2. 発表標題 Chronological sequence of the Initial and Upper Paleolithic in Mongolia and its relationship to ecosystem changes during MIS3
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Research (INQUA) Congress, Dublin, Ireland (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hasegawa H., Noma N., Katsuta N., Murayama M., Tamura T., Izuho M., Ichinnorov N., Davaadorj D., Sasaoka M., Hasebe N., Iwai M
2. 発表標題 Paleoenvironmental reconstruction of southwestern Mongolia since the MIC 3: evidence from Lake sediment record and comparison with archaeological record
3. 学会等名 XX International Union for Quaternary Research (INQUA) Congress, Dublin, Ireland (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 G. Gallo, M. Fyhrrie, C. Paine, S. Ushakiv, M. Izuho, B. Gunchinsuren, N. Zwyns, A. Navrotsky
2. 発表標題 Differential preservation of burnt bone: Impacts on the visibility of anthropogenic fire in the Upper Paleolithic Taiga Steppe
3. 学会等名 9th Annual ESHE (European Society for the study of Human Evolution) Meeting, Palais des Congres (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Zwyns N., M. Izuho, B. Gunchinsuren, C.H.Paine, S.Rigaud, G.T.Gallo, Y.Nakazawa, F.Akai, T.Ueki, P.Zhang, J.C.Gillam, S.Talamo, B.Tsendendorj, D.Odsuren, G.Angaradulgun, D.Bazargur, T.Libois, J.Galfi
2. 発表標題 The open-air site of Tolbor-17 (North Mongolia): lithics, fire and ornaments during the MIS3
3. 学会等名 International Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of the 90th Anniversary of the Discovery of the First Skull of Peking Man (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masami Izuho and Nicolas Zwyns
2. 発表標題 The site of Tolbor-17: new insight into the Upper Paleolithic of Mongolia
3. 学会等名 Arkheologisch Damdinsurengiin Tseveendorj (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Izuho, M.
2. 発表標題 Refining the chronology of small flake-based assemblages during the Early Upper Paleolithic on Hokkaido (Japan)
3. 学会等名 9th meeting of the Asian Paleolithic Association, Altai, Russia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Saino, H. & Iizuka, F.
2. 発表標題 The Great East Japan Earthquake - 2011 and Traces of Past Tsunami Disasters on the Sendai Plain of Japan
3. 学会等名 Catastrophes in Context (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iizuka, F.
2. 発表標題 The Timing and Behavioral Context of the Adoption of Ceramics in Greater East and Northeast Asia and the First People Without Pottery in the Americas
3. 学会等名 The International Union of Prehistoric and Protohistoric Sciences (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Izuho, M., Byambaa, G., Batmunkh, T., Akai, F., Hiromatsu, K., Iizuka, F., Dashzeveg, B., Davaakhuu, O. & Nakazawa, Y.
2. 発表標題 Excavation at the Upper Paleolithic Site of Tarvagatain Am, Khuder Sum, Selenge Aimag (Mongolia): A Preliminary Result
3. 学会等名 The International Union of Prehistoric and Protohistoric Sciences (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iizuka, F., Izuho, M., & Aldenderfer, M
2. 発表標題 The Incipient Jomon Pottery Technology from Southern Kyushu, Japan: Cases from Nakao and Mukaigakoijo-Ato Sites
3. 学会等名 Society for American Archaeology 83rd Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 J.Christopher Gillam, N.Zwyns, M.Izuho, T. Bolorbat and E.Rybin
2. 発表標題 Shedding New Light on Upper Paleolithic Cultural Landscapes of Northern Mongolia
3. 学会等名 Society for American Archaeology 83rd Annual Meeting, Washington (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Graf, K., T.Goebel and M.Izuho
2 . 発表標題 Stemmed Points: Are they a circum-pacific phenomenon?
3 . 学会等名 The Wilson Workshop, Victoria, Canada ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Terry, K., I.Buvit, and M.Izuho
2 . 発表標題 A Last Glacial Maximum Paleo-Sakhalin-Hokkaido-Kuril Peninsula Refugium and its Implications for the Peopling of the Americas,
3 . 学会等名 The 18th UISPP world congress, Paris ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Gallo, G, M. Izuho, G.Byambaa, C.Paine, and N.Zwyns
2 . 発表標題 Fire on the Steppe: Behavioral Insights from Ephemeral Combustion Features
3 . 学会等名 The 18th UISPP world congress, Paris ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Izuho, M.
2 . 発表標題 Preservation conditions of the initial and early Upper Paleolithic sites in northern and eastern Mongolia
3 . 学会等名 PaleoAsia 2018 The International Workshop, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakazawa, Y., A.Iwase, N.Oda, F.Akai, K.Hiromatsu, M.Izuho and H.Ohtorii
2. 発表標題 Some thoughts on the terminal Pleistocene stone tool cache: A case study from the Tomamu-daichi site, eastern Hokkaido, Japan,
3. 学会等名 PaleoAsia 2018 The International Workshop, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fumie Iizuka
2. 発表標題 Investigating the Advent of Neolithic in the Late Holocene Panama and Late Pleistocene Japan through Lab-Based Material Study on Pottery
3. 学会等名 Titan Archaeology Club, Anthropology, California State University, Fullerton (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fumie Iizuka
2. 発表標題 The Timing of Sedentism and the First Ceramic Production in the Isthmus of Panama.
3. 学会等名 Alternatives Models of Cultural Development of Indigenous Coastal Societies in Tropical America. Escuela Superior Politecnica de Litoral, Guayaquil, Ecuador. (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fumie Iizuka
2. 発表標題 Coccion, Intercambio y Ambiente: Decisiones Tecnicas de los Primeros Alfareros de Panama.
3. 学会等名 XI Congreso de la Red Centroamericana de Antropologia, Universidad de Costa Rica, San Jose, Costa Rica. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fumie Iizuka
2. 発表標題 Production, Distribution, and Use of the First Pottery from the Tropics of Panama.
3. 学会等名 Pizza Talk, Cotsen Institute, University of California, Los Angeles (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sato, Eiichi, Sano Kyohei, Izuho Masami
2. 発表標題 Internal structure and magma ascent process of obsidian lavas in the south of Kamchatka Peninsula, Russia
3. 学会等名 IAVCEI 2017 Scientific Assembly, Portland State University, Oregon (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 出穂雅実
2. 発表標題 北東アジアのLGM先史狩猟採集民の技術的・行動的研究(1990年代後半～2017年)
3. 学会等名 LGM古植生科研会議、京都府立大学、京都市(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Izuho Masami, Ferguson Jeffrey R.
2. 発表標題 Temporal Changes and Regional Varieties in Obsidian Use during the Upper Paleolithic on Hokkaido (Japan)
3. 学会等名 11th International Symposium on Knappable Materials, Buenos Aires, Argentina (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 出穂雅実・門脇誠二・太田博樹
2. 発表標題 北東アジアにおける現生人類拡散プロセスのいくつかの問題：最初のアメリカ人に関する研究の進展から
3. 学会等名 文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016&#8211;2020：パレオアジア文化史学第9回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iizuka, F.
2. 発表標題 The Late Pleistocene Origins of Pottery in East and Northeast Asia: Implications for the Peopling of the Americas
3. 学会等名 Anthropology & Heritage Studies Seminar Series, University of California, Merced
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	出穂 雅実 (Izuho Masami)  (20552061)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授  (22604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of Arizona		
ロシア連邦	Transbaikal State University		
米国	Central Washington University		

共同研究相手国	相手方研究機関			
United States of America	University of California, Davis			
米国	University of California, Los Angeles			
米国	California State University, Fullerton			
ロシア連邦	Russian Academy of Sciences, Siberia			
モンゴル	Mongolian Academy of Sciences			
米国	University of California, Merced			